

づくり、づくりかえるプロセスを通して、 問いを更新していく文学の学び

——「海の命」(六年)

熊本大学教育学部附属小学校教諭

溝上剛道



「海の命」は空所が多く、さまざまな場面で「なぜ」という疑問が浮かび上がってくる。しかし、その多くは、「行動の理由」や「心情」に関するもので、それらを個別に解決していくだけでは、低・中学年の指導事項にとどまってしまう。高学年では、それらを、「物語の全体像を具体的に想像する」とことへとつなげていくことが求められるが、「全体像を考えましょう」と投げかけても、子どもは何を考え、どう表現すればよいか捉えづらい。

そこで本単元では、映画の予告編のような、「『太一のモノログ』をつくる」という言語活動を設定し、三、四人のグループで協働してその制作に取り組むようにする。モノログとは人物の独白のことで、太一の視点から「これは——物語だ」という語りで始まるモノログをつくっていく。そのモノログをつくり、つくりかえるプロセスを通して、一人一人が「物語の全体像」へつながる問いを見いだし、その

ポイント1 「まずつくってみる」ことで、 必要感のある問いを引き出す

自分の問いを見いだすうえで大切にしたいのは、「まずつくってみる」ことである。単元のまとめとしてではなく、第一時から、「これは——物語だ」というモノログでの語りだしを考える場を設ける。多くの場合、「これは海の命についての物語だ」など曖昧な表現になると予想される。そこで生じる困り感や納得がいかない思いを取り上

げ、「よりよいモノログにするには、どんな問いの解決が必要か」を考えさせる。その際、既習事項に立ち返らせることで、「太一の心情の変化」や「おとう・与吉じいさの人物像」などが「物語の全体像」と関係していることに着目し始めるだろう。そのような見通しを共有することで、必要感をもって自分の問いを立てられるようにする。

ポイント2 鍵となる言葉に立ち止まらせ、 問いの更新を促す

「海の命」は、先述のとおり空所が多く、会話文や描写も少ない。それゆえ、問いを解決しようとしても、「根

拠が見つからない」「これだけではわからない」という困りごとが出てくる。それらを共有したうえで、「少ない描

解決と更新を繰り返しながら、自分なりの考えを広げ深めていく文学の学びを生み出していく。

単元計画(全8時間)

1時 初読の感想を交流し、「太一のモノログ」づくりを言語活動として設定する。モノログづくりの試しの活動に取り組み、物語の全体像につながる問いを立てる。

2時 人物像を捉え、太一に影響を与えた人物についての、「太一のモノログ」を書く。

3時 心情の変化や相互関係を捉え、山場についての、「太一のモノログ」を書く。

4時 人物や山場についてのモノログをもとに、モノログの語りだしを再考し、「太一のモノログ」を仕上げる。

5時 立松和平による「——のいのち」シリーズで、同じように中心人物のモノログをつくり、身につけた力を振り返る。

ポイント3 鍵となる言葉の比較から、 「語りだし」の再考へと繋げる

ポイント②で挙げた中でも、「村一番・本当の一人前」は、太一のもの見方や考え方を捉え直していくうえで、特に鍵となる言葉である。その言葉に対する問いをもっている子どもを

取り上げ、モノログの語りだしに立ち返らせていくことで、場面と場面を比較したり、関連付けたりしながら、自分の問いの更新を促していく。

写の中で鍵となる言葉はどれか」と投げかけ、「村一番・本当の一人前」「海で生きられる・海に帰る」「海のめぐみ・海の命」などの言葉への着目を促す。

それらと関係する人物と結び付けながら板書で整理し、「○○とは」「○○と□□の違いは」のように、自分の問いを更新していく姿を生み出していく。

「村一番」と「本当の一人前」の違いは?



「一人前の漁師」と言っているのは太一でしょ。太一以外から見たら「村一番」なんだけど、太一はまだ一人前とは思えないんじゃない。



そうだとすると、太一はこの物語を「どんな物語」だと語と思う?



「僕が一人前になれなかった物語」となるけど、それでは終わらないはず。太一の価値観が山場で変わっていったんじゃないかな。



そうすると、太一の価値観は物語を通してどう変わったんだろう。



ウェブサイト「太一のモノログ」のワークシートをご覧になれます。